



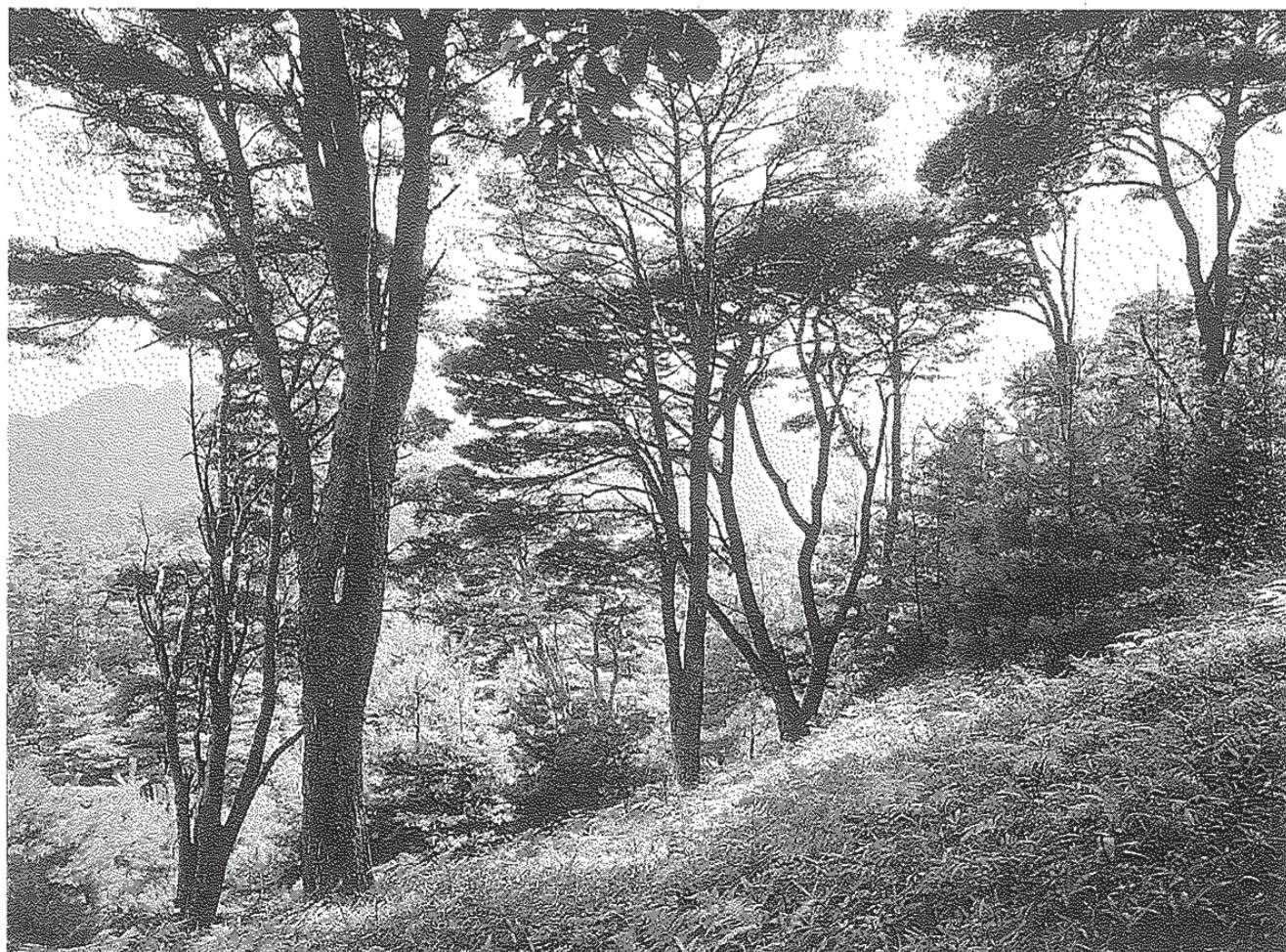
ウツクシマツ自生地

大津市歴史博物館
館長 木村 至宏

近江は美しい自然と東西を結ぶ交通の要所という、他の地域にみられない恵まれた風土を有しています。それを背景に豊かな歴史や文化が培われてきました。いまも近江の各地でそれを容易にみることができます。なかでも文化財にそれが顕著に表出しています。

とくに文化財の範疇に入る天然記念物でも例外ではありません。たとえば国指定だけを取りあげてみても石山寺珪灰岩・比叡山鳥類繁殖地・平松（甲西町）のウツクシマツ自生地・熊野（日野町）のヒダリマキガヤ・鎌

掛け谷（日野町）のホンシャクナゲ群落・鎌掛の屏風岩・別所高師小僧・綿向山麓の接触変質地帯・南花沢（湖東町）のハナノキ・北花沢（同町）のハナノキ・了徳寺（米原町）のオハツキイチョウ・息長（近江町）ゲンジホタル発生地などがあります。いずれも他府県にあまり類例のない稀少価値の高いものばかりが含まれています。ここでは全国唯一といわれている平松のウツクシマツ自生地について略述してみましょう。



美松山に特異な形態をみせているウツクシマツ

(寿福 滋氏提供)

記録にみるウツクシマツ

ウツクシマツは、甲賀郡甲西町平松の標高226.6mの美松山に自生しています。その地は旧東海道の平松の集落から南へ約600mほど入ったところに位置します。このウツクシマツは、美松山の南西斜面一帯だけに大小およそ230余本が群生し、周辺の松とは形態を異にしています。樹形は普通の樹木にみられる主幹ではなく、一本の根幹から地表近くで放射状に幹が分かれて長幹となり、まるで傘のような形状を成しています。

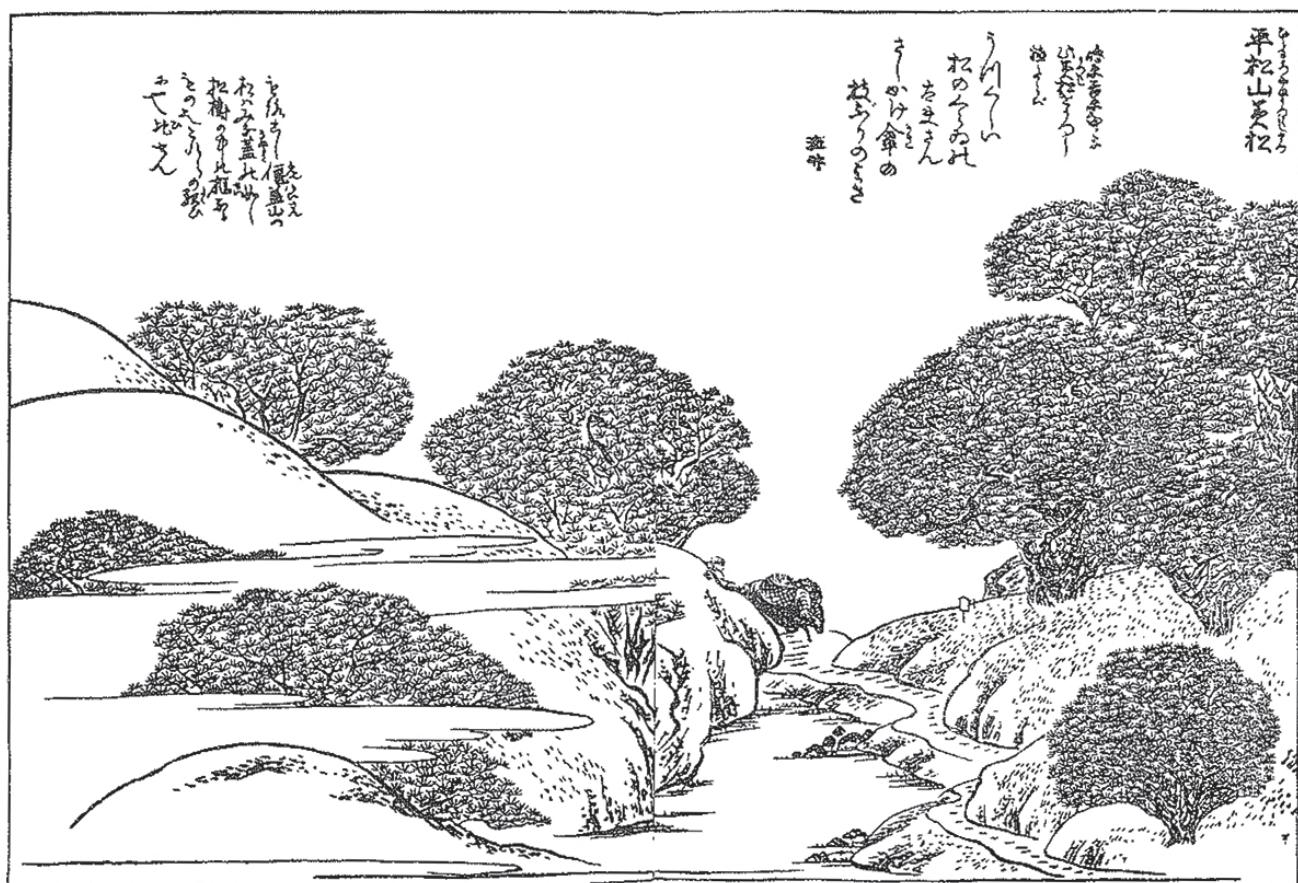
このウツクシマツについて管見の限りでは、最も古い記録は江戸時代の享保19年（1734）に編さんされた『近江輿地志略』です。これには「美松 平松村にあり神木なりと云々」とあります。神木は近くの松尾大明神をまつる平松大明神社としています。さらに『同記』に伝承としてこの地を領地としていた藤原頼平なる人が、仁寿3年（853）に山城国の松尾大明神をここに勧請し、松尾の松の字と自ら

の頼平の平の字を使って平松としたとあります。この伝承をある程度信用するならば、ウツクシマツは1000年以上も前からすでに存在していたことになります。

ウツクシマツの自生地が、日本の代表的な街道の一つであった東海道（伊勢大路）に近接していたことから、江戸時代には名所としてよく知られていました。ちなみに寛政9年（1797）の『東海道名所図会』には

街道筋平松村山中にあり。又松尾明神祠あり。仁寿年中藤原頼平に神記ありて、山城松尾人をここに勧請す。平松の号これより初る。

美松と号する事は松の葉細く艶ありて四時
変せず蒼々たり。松の高さ小大あり。大樹
は根より四、五尺までは株常の雄松の如し。
それより枝々数十に分れ、近く見れば蓋の
如く、遠く眺めば側柏に以たり。
始皇の封松、李白が南軒の孤松など雲霄を
凌ぐの靈樹に異ならず、葉は雌松、株は雄



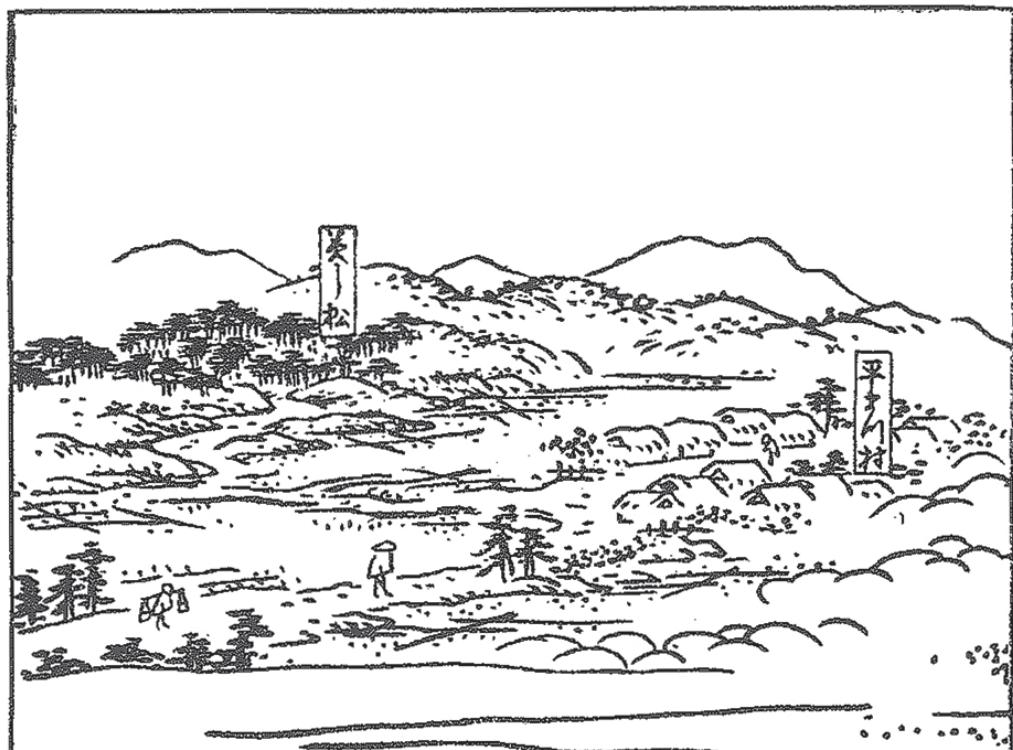
寛政9年（1797）発刊の『東海道名所図会』に描かれたウツクシマツ

松、その雌雄
分明ならず。
緑落て同姓生
ず。山中に際
りてことごと
く同木なり。
隣山は常の松
にして、美松
一株もなし。
また、他所へ
移し、或いは
鉢植などする
程なく枯れ育
せず。和漢松
の部類を考う
るにいまだ此
類を聞く。遠

近ここに来て初で観る人、賞嘆せずとい
うことなし。風土の奇なり。
と、作者秋里籬島はウツクシマツについて見
て感じたままを詳細にみごとな文で綴ってい
ます。ならびに『同名所図会』にはウツクシ
マツの樹容をよくあらわした挿図(図版参照)
もあります。また、同年の『伊勢參宮名所図
会』・『近江名所図会』にもウツクシマツの項
があります。それには

平松村、此村の右の方の山に美し松とい
う。一山凡二町余の間、不残雌松にて、
其の生小子形一樹にして根下より、數十幹
を出す。甚だ奇觀なり

とあります。『同名所図会』にはウツクシマツ
の挿図もあり、それには「平松村の後のもり
に美し松というあり」の字句を添えています。
このように名所図会などによって全国的に知
られ、街道を往来する旅人たちも見物に出かけたにちがいありません。しかし、なかには
大田南畠(蜀山人)のように「平松という所
の松うつくしとて、うつくし松といふよし聞
しかば、右のかたに松ばらの見やるるを、目
をとめて見しかど、さのみならざりき、すべ



「近江名所図会」に描かれたウツクシマツ

てきく所見る所に異なり」と、ウツクシマツ
自生地の場所を感違ひしていたことが、享和
元年(1801)の『改元紀行』にみることができます。

さらに、少し年代がさがりますが明治24年
(1891)の『近江史跡案内記』にも「美松 平
松村ニアリ此松ハ根幹ヨリ枝数條ニ分レ、葉
色軟翠ニシテ尋常ノ松ト異ナリ、世ニ美シ松
ト呼ヒ遊賞アル者アリ。土人云フ平松明神ノ
神木ナリト」と記されています。

また、ウツクシマツ自生地の地元でこよな
くそれを愛し、広く知らせることに努めた俳
人がいました。それは江戸時代の平松村代官
奥村俊治(亜溪)の妻志宇(しう)であった。志宇は
俳諧に精通し、多くの人々を教導しました。
そして自分の家を美松亭と称し、自らも美松
亭志宇と名のるほどウツクシマツに心を寄せ
たのです。

志宇らは享和元年(1801)から文政12年
(1829)までのおよそ30年間にわたって、ウ
ツクシマツについて著名な俳人・歌人が詠ん
だものを集めた吟詠集「千載集」を文政13年
に編さんしています。その序には志宇が「春



(寿福 滋氏提供)

の色 べつなる松の「操かな」の俳句をのせ
ているのをはじめ

尋ね来て 今日ぞ近江の里人の うつくし
松というも理り 高木与吉郎源守正
紅葉も花も及ばぬ深緑 これぞ近江の名に
立てる松 大久保讚岐守藤原忠実
千代かけて 神の恵にあふ路や 添ふる緑
も美し松 牧野伊予守源成著
などの詩歌がある。

ウツクシマツの樹形

傘状をなした形態をもつウツクシマツ自生地は、前述のように国指定の天然記念物です。指定されたのは大正10年（1921）3月3日であった。そのときの官報公示によると次のとおりです。

名称 三雲村美松自生地

所在地 滋賀県甲賀郡三雲村大字平松字美松
形状大小数量等 前記地域ノ幾シト全面ニワ
タリテ発生ス。幹ノ大小高低一様ナ
ラサレトモ、何レモ皆傘形ヲ呈シ大
ナルモノハ樹高20余尺（約6.6m）ナ
ルモ、小ナルモノハ僅ニ、34尺ニ過
キズ。又コレヨリ更ニ縮小ナルモノ、

同様ニ傘状ヲ成セルモアリ。ソノ充
分ニ発育セルモノハ、伊太利ノ傘松
ニ彷彿タルモ、一般ノ形状ハ、本邦
ノ庭園ニ見ル所ノ、俗ニ云フ单葉松
(他行・多形松) ト一致セリ。葉針
ハ、幹ノ長大ナルモノハ、概シテ長
ク、縮小ナルモノハ短ク、長短一様
ナラズ、松実ハ概ネ小ナリ。

現状 美松ノ発生地ハ、山腹ノ斜面ニシテ、
付近ハ一帯ニ赤松多ク生シ、林下ニ
ハ、いさかき、やまつづじ、もちつ
つじ等雑生ス。美松ハ其ノ発生地ノ
局限セルト樹形ノ実ナルトニ因リ古
来世ニ知ラレ、園芸品トシテ採去ラ
ルモノ多キニ因リ、明治15、6年頃
土地ノ有志者、美松山保勝会ヲ組織
シ採取ヲ禁セリ。

指定の理由 赤松ノ一ノ変形トシテ保存要目
天然記念物中植物ニ関スル部、第七
ニ該当シ保存ノ要アルニ由ル

保存ノ要件 公益上必要アル場合ノ外、区域
内樹木ノ伐採、土石ノ採取其ノ他現
状ノ変更ヲ許可セサルヲ要ス

地積 壱町八反九畝壹四歩（約1.8ha）

この官報の公示によってウツクシマツのおよその樹容を知ることができます。そして、昭和32年（1957）7月に文化財保護委員会の告示によって、天然記念物指定から「特別天然記念物」となり、名称も「平松のウツクシマツ自生地」とそれ改められました。

ここで先学の研究をもとにウツクシマツの樹容などについてみてみましょう。京都大学農学部の吉川勝好氏が「ウツクシマツの研究の歩み」（『天然記念物平松のウツクシマツ自生地保護増殖事業報告書』所収 昭和55年）のなかで樹形について次のことを記しています。いわゆる昭和23年（1948）に自生地の樹形をみて、4つの樹型に分けています。

①扇型 地際から1.5~2 mのところで、幹がいくつかに分岐し、扇状となり樹冠の上部が山形になる。

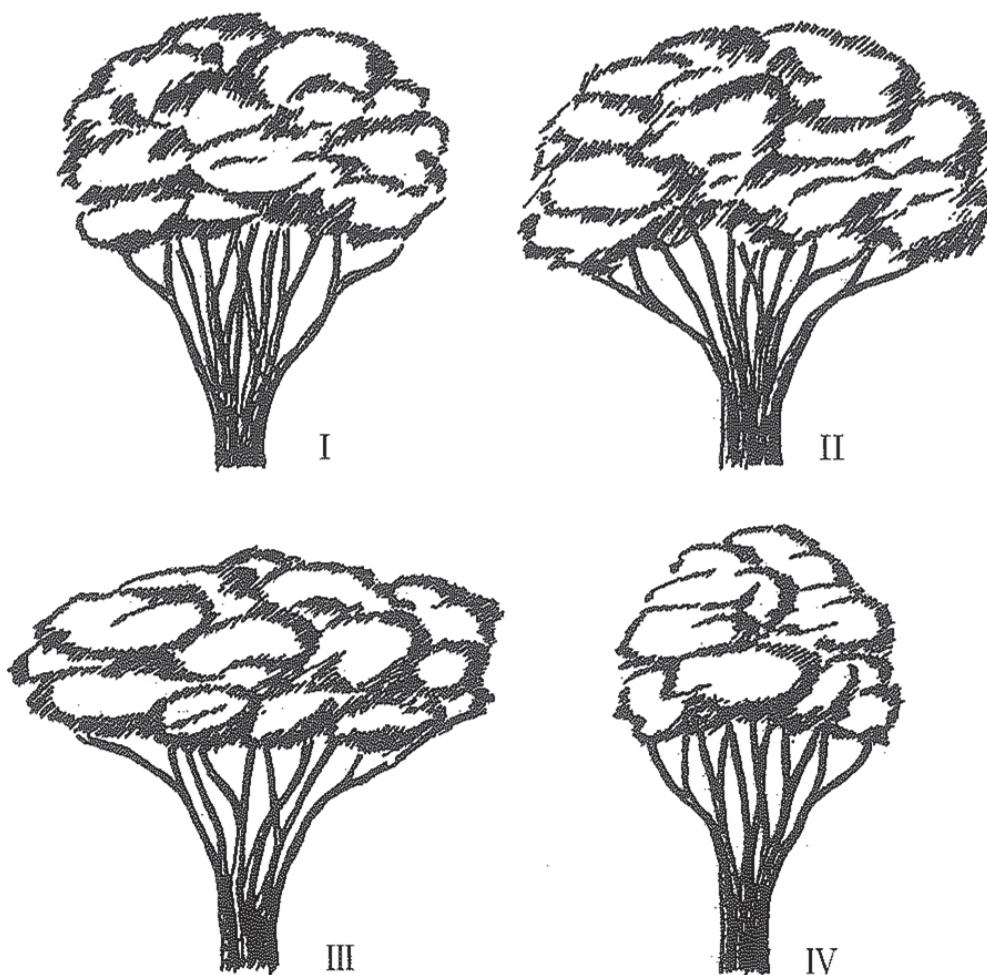
②扇型 ①と同じ型であるが、上方がやや円（丸）型となっている

③傘型（多形型） 地際から幹が多数分岐して、樹冠は傘状に拡がる。

④篠型 幹の分岐のしかたは③と同じであるが、樹冠の拡がりがせまく、全体が篠状となる。

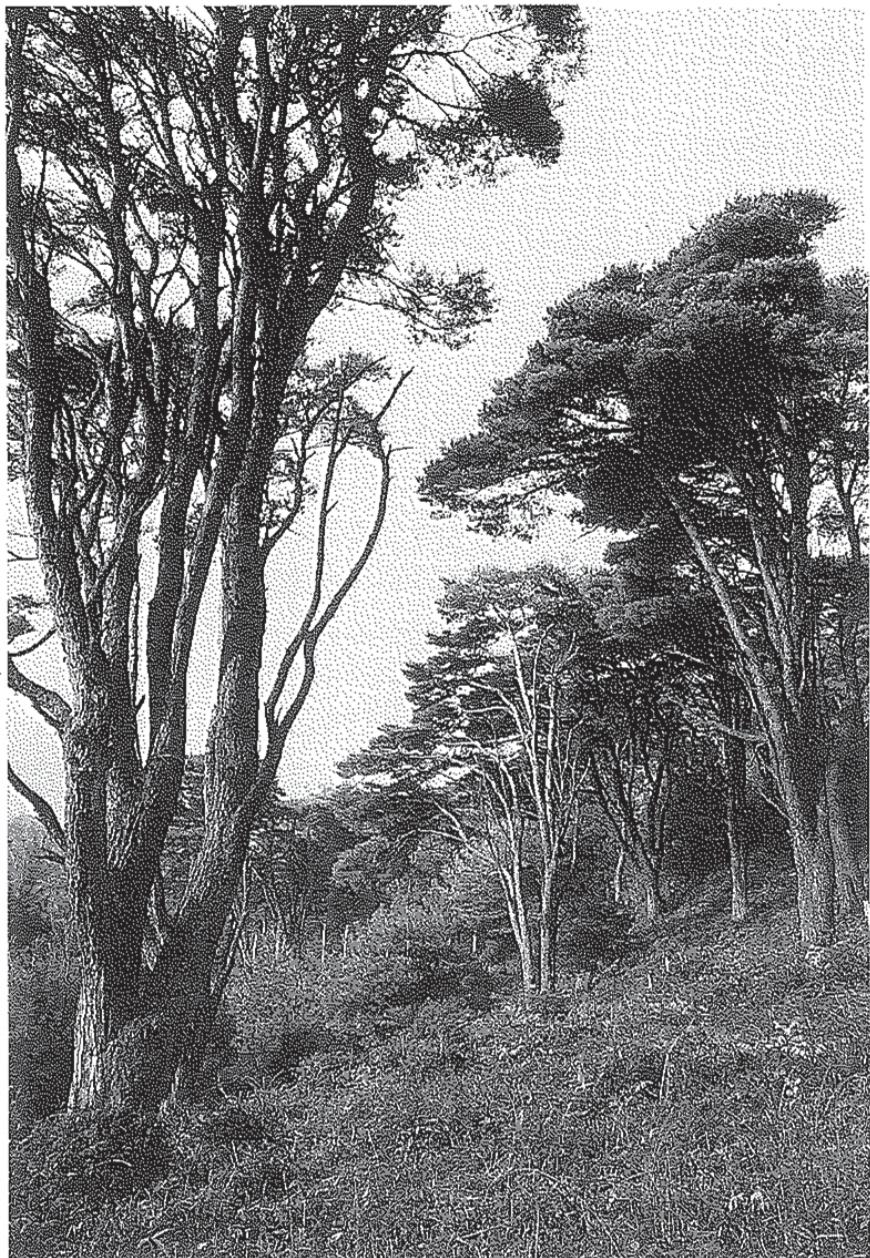
これらのウツクシマツの型の分類をみると、一般の桧・杉・松などの樹型と大きく異なり、独特の形態を呈していることがわかります。

前述のようにウツクシマツの特性として幹



I 扇形（上方山形） II 扇形（上方やや円形）

III 傘形（多形型） IV 篠形



(寿福 滋氏提供)

の分岐が多いことですが、前掲の報告書によれば、その形質は幼苗時から発生しています。2年生苗でも分岐があり、変形を示すものが73%から80%の多くを数えます。これは種子いわば母樹そのものに、その性質を含んでいることによるのでしょうか。

ところで、ウツクシマツの特異な形態は、自生地の特殊な土質によるといった自然的発生が大きいと考えられてきました。ちなみに大正13年（1924）の『滋賀県天然記念物調査報告書』によると「美松の簇生せる場所は一帯の岩土にして角岩よりなり、表面は薄き土

にて被さるれども処々の岩石の露出せる処あり、土地の状態かくの如くあるにより根の簇生を防げ、その交互作用によりて幹の生長に変調を起し、主幹は直に伸びずして数多の根にわかれ遂に傘状を呈するに至れるや知るべからず」とあり、この見解がやや支配的でした。

その後関係機関の地道な研究が重ねられ、平松以外の他の地域において植栽すれば、同様の型になることが、「平松のウツクシマツ自生地保護増殖事業報告書」に報告されています。その事例は京都大学農学部付属演習林上賀茂試験地、八王子市の農林省林業試験場、油日林木育種場などにみることができます。そして苗畑で養成した苗木のうち、樹形のよいウツクシマツが京都大学農学部構内に並木として植栽されています。

それはともかく、全国でもめずらしいウツクシマツの自生地について、甲西町や地元

の人たちの熱心な管理によって、いまも私たちはその姿をみることができます。しかし、昭和50年ごろからのマツクイムシの虫害によって枯損木が発生、それに対処すべく同54年に平松ウツクシマツ自生地の保護対策委員会が設置されその保護につとめられています。

滋賀文化財教室シリーズ No.158号

発行年月日 1996年2月5日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-21 大津市瀬田南大壹町1732-2
TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525